

# パーソンズの科学論に関するメタ的考察： 規範をめぐるナチズムとのコンフリクト

久保 秀 雄

## A Meta-Reflection on Parsons' Theory of Science: Conflicts with Nazism over Norms

KUBO Hideo

### 【目次】

- I 問題の設定：緊張関係
- II 方法：メタ的考察
- III 出発点：科学の基本的特徴
- IV 途上：どのように進歩するのか
- V 到達点：成果と残された課題

### I 問題の設定：緊張関係

社会学の第一人者であるタルコット・パーソンズの人と業績について理解を深めるうえで、ナチズムは重要な鍵の一つとなる (Gerhardt 2002)。そのような解釈を、パーソンズの科学論に焦点を絞り範囲を限定して精査することで、本稿はより綿密に展開する。

パーソンズがナチズムについて正面から論じた著作の嚆矢となるのが、大学新聞に寄稿した1938年の論説“Nazis Destroy Learning, Challenge Religion”である<sup>1</sup>。そのなかでパーソンズは、ドイツが誇るアカデミックな諸制度を完膚なきまで叩き潰しているナチズムについて、科学の精神を含む偉大な学問の伝統に徹底的に敵対する不倶戴天の敵 (a deadly enemy for us) だと位置づけている (Parsons [1938]1993: 82-83)<sup>2</sup>。つまり、科学を中心とする学問にとってどのような意味をもつのかという観点からナチズムについて論じ、科学とナチズムは緊張関係にあると捉えている。

また、地元紙に寄稿した1940年の論説“New Dark Ages Seen if Nazis Should Win”でも、パーソン

ズは科学とナチズムの緊張関係を次のように強調している。科学・技術が典型であるように、恣意よりも合理性を重視するのが西欧のリベラルな社会である。しかし、ナチズムはそれに真っ向から対立する。したがって、科学や技術の成長をもたらす源泉となったりベラルな批判的精神は、どんな異論も容赦なく弾圧するナチズムのドグマティズムにとって代わられ、枯渇すると考えられる (Parsons [1940]1993: 156)<sup>3</sup>。

このように、パーソンズは科学とナチズムの緊張関係を、リベラリズム対ドグマティズムといったコンフリクトなどに着目しながら強調している。もっとも、いずれも新聞に掲載された短編の論説であるため、詳しく論じられているわけではない。しかし、彼の代表作として知られる二編の本格的な長編の専門書では、科学に関する詳しい論述がある。すなわち、1937年に刊行された *The Structure of Social Action* (慣例に従って以下では SSA と略記) と 1951年に刊行された *The Social System* (慣例に従って以下では SS と略記) では、彼の科学論が本格的に展開されている。ただし、その科学論ではナチズムとの関係までは明示されていない。

そこで本稿では、短編の論説で強調されていた科学とナチズムの緊張関係を導きの糸として、SSA や SS といった長編の専門書 (やその他の著作) で展開されている科学論から、科学とナチズムの緊張関係をより深く理解するための含意を汲みとる。既に先行研究で明らかにされており、SSA や SS からはナチズムへの対抗とリベラル・デモクラシーの擁護という含意を汲みとれる (Gerhardt 2002)<sup>5</sup>。ただし、そのような解釈は、両大著を中心とするパーソンズの様々な業績を幅広く網羅的に検討して導かれており、パーソンズの科学論を精査して導かれているわけではない。したがって、科学とナチズムの緊張関係については、理解を深める余地がまだ残されている。そこで、本稿はとくに規範をめぐるコンフリクトを手がかりとして科学とナチズムの緊張関係について考察を加えることで、ささやかながらもその空隙を埋める。と同時に、科学とナチズムの緊張関係について理解を深めることで、パーソンズの科学論についてもナチズム論についてもさらに理解を深めるための足がかりを得る<sup>6</sup>。

## II 方法：メタ的考察

次章以降で次第に明らかとなっていくように、SSA や SS で展開されている科学論から科学とナチズムの緊張関係をより深く理解するための含意を汲みとる方法は、パーソンズの科学論そのものから導出している。つまり、パーソンズの科学論に準拠してパーソンズの科学論の含意を汲みとるので、メタ的な観点から再帰的な適用を行うのが本稿の方法となる<sup>7</sup>。

そもそもパーソンズは、SSA の最初の章で科学の特徴やその方法について詳しく解説し、そのうえで残りの章では解説した通りの科学論に準拠して、自らの科学的な研究成果を論証している。その骨

子を紹介すると、パーソンズはまず、イギリスのアルフレッド・マーシャル、イタリアのヴィルフレド・パレート、フランスのエミール・デュルケーム、ドイツのマックス・ウェーバーといった「知的伝統、社会的環境さらに個人的性格ができるだけ大きな多様性を示しているような人物」(Parsons [1937]1968: vol.1, 13, 訳 (1) 32 頁) をサンプルとして抽出する。そして、各人の卓越した業績を「言語によって表現されたものであり、一つの事実に属している」(Parsons [1937]1968: vol.2, 697, 訳 (5) 91 頁) と捉えて、観察の対象とし分析を行う。すると、そのような科学的方法に基づき考察を加えた結果、各自が異なったアプローチから各々独自に経験科学上の偉大な業績を挙げているにもかかわらず、「問題の取り扱い方のなかに何か共通の概念図式が含まれている」ことを明らかにできたのである (Parsons [1937]1968: vol.1, xxii, 訳 (1) 13 頁)<sup>8</sup>。

このように、パーソンズは SSA において、かつて一世を風靡した功利主義的な説明モデルの限界を突破する新たな概念図式の生成を、偉大な業績群のなかに経験的な事実として発見できたと報告している。そして、その科学的な新発見を踏まえて、人間の社会的な行為の構造を定式化した科学的な理論を新たに定立できると論じている (Parsons [1937]1968: vol.2, 719-725, 訳 (5) 123-131 頁)。つまり、「社会現象の科学的分析において大きな革命となるような」理論の発展を見出すことができ (Parsons [1937]1968: vol.1, xvi, 訳 (1) 5 頁)、「人間行為に関する広範な事実が以前よりも明確にそして正しく理解することができるようになった」と、科学の「めざましい進歩」を科学的に明らかにしている (Parsons [1937]1968: vol.2, 775, 訳 (5) 200 頁)<sup>9</sup>。

したがって、パーソンズ自身が科学の進歩を科学的に明らかにするという、科学に徹頭徹尾こだわったメタ的な観点からの再帰的な適用を行っている<sup>10</sup>。そのような取り組みは SS でも同様にみられる。SS では、いわば科学と社会の相互影響関係について、パーソンズにとっては科学の一部門となる科学としての社会学に特有の観点から考察を加えている (Parsons 1951: 326-348, 訳 326-345 頁)<sup>11</sup>。すなわち、メタ的な観点から、先述の SSA では科学内在的に理論の革命的な発展を明らかにする一方で、SS では科学外在的に科学の進歩を促進する / 抑制する社会的諸条件などについて明らかにしている。

こうしたパーソンズ自身の取り組みを踏まえ、その延長線上でより発展的な取り組みとして、パーソンズの科学論やさらにはナチズム論から、科学とナチズムの関係をより深く理解するための含意を汲みとるよう考察を加えるのが本稿の試みとなる<sup>12</sup>。

### Ⅲ 出発点：科学の基本的特徴

#### 1 事実と論理

まずは出発点として、パーソンズの科学論そのものの要点を把握しよう<sup>13</sup>。パーソンズは 1940 年の論説で、ナチズムは恣意が支配するのに対して、科学は合理性の原則が規範になると論じている

(Parsons [1940]1993: 156)。また、その前年に執筆された「学問の自由」をテーマとする未公開の草稿では、科学の進歩は合理化のプロセスとして把握できると論じている<sup>14</sup>。そして、そのような観点から科学の主要な構成要素を次の2点に求めている。すなわち、 $\alpha$ 「事実の観察・検証」と $\beta$ 「事実についての厳密な論理的推論」である (Parsons [1939]1993: 88)<sup>15</sup>。この2つの要件を満たすことが、科学にとっての規範になるわけである。

## 2 西欧の文化的伝統

もともと、 $\alpha$ と $\beta$ という要件は、偉大なる西欧の文化的伝統として「学問」の地位を獲得しているなら、科学ほどでないにせよ他の分野でも共有されていると、パーソンズは指摘する。たとえば、信仰の合理的な組織化と正当化を図る神学でも、あるいは歴史や文芸批評でも、 $\alpha$ 「叙述の正確さ」や $\beta$ 「推論の明晰さと論理」は遵守すべき規範になるという (Parsons [1939]1993: 88)<sup>16</sup>。

というのも、SSでより詳しく述べられているところによれば、神学を含む西欧における人文教養の偉大な伝統は、「証拠の尊重」という恣意に左右されない公明正大な客観性を大切にしてきたからである。それは、歴史的・文学的なテキストが真正であるかどうかに対する関心が、他の社会では決してみられないほど顕著であることに表れているという。そして、公明正大な客観性を旨とする文化的伝統は、人文教養と科学の複合から成り立つ大学において具現化されており、大学が担ってきたエリート教育を通して社会にも広く浸透し、科学の進歩が社会的に支持されるような地盤の形成に寄与してきたと論じられている (Parsons 1951: 341-342, 訳 339-340 頁)。

## 3 分化か未分化か

また、SSでは科学とそれ以外のものとの比較対照を通して、科学の特徴が次のように把握されている。

パーソンズは、道徳的な評価を下したり情緒を表現したりするような行為とは違って、 $\alpha$ 「正確かどうか」や $\beta$ 「妥当かどうか」を現実に照らし合わせて確かめようとする認知そのものへの関心が何より優先される行為を「研究」として定義する。つまり、道徳的な評価を下すことなどは差し控えて、もっぱら認知すること自体への関心に特化して客観的な真偽の基準を優先するのが、研究にとっての規範になると考えられている。そして、研究のなかで、超自然的な神や霊など非経験的な存在は射程外とし、もっぱら経験的な対象についての考え・見解 (ideas) や確信・信念 (beliefs) をもたらす活動のみを「科学」とし、そうでない残余を対象とするのが「哲学」になると区別している。

他方で、科学や哲学とは異なり、客観的な真偽の基準だけに特化・分化せず道徳的な善悪の基準や情緒的な好悪の基準も未分化に融合していて道徳的・情緒的なコミットメントを求めるのがイデオロギーや宗教的観念になると類別している<sup>18</sup>。つまり、事の真偽を確かめようとする認知への関心を保

持しつつも、それ以上に道徳的・情緒的な観点から「何が望ましいのか」を示す評価への関心が優先されるのがイデオロギーや宗教的観念になる<sup>19</sup>。しかも、その望ましいとされる状態を実際に実現しようとする事へのコミットメントが、集団のメンバーシップ（成員資格）に関わる規範として、求められるという（Parsons 1951: 329-332, 367-369, 384-385, 訳 328-331, 362-364, 381-382 頁）<sup>20</sup>。

#### 4 優先されるコミットメント

すると、上記のような科学の特徴からすると、科学とナチズムの緊張関係について次のように推論できる。科学は客観的な真偽の基準へのコミットメントを優先するのが規範となる。他方で、トゥーレ協会という神秘主義的な結社を重要な思想的源泉の一つとするナチズムは、イデオロギーないし宗教としての性格を濃厚に保持し、道徳的・情緒的に望ましい状態を実現することへのコミットメントを優先するのが規範となる。だから、双方の間に緊張関係が生じると理解できる。

たとえば、1942年に公刊された“Democracy and Social Structure in Pre-Nazi Germany”と題するナチズム台頭の背景事情について論じた論文で、パーソンズは次のような分析をしている<sup>21</sup>。まずナチズムは、原理主義（fundamentalism）を重要な淵源としている。原理主義は、科学が寄与した合理化の進行による進歩に対して、心情面で強い拒絶感を抱き反動的により原始的な状態に回帰することを志向する<sup>22</sup>。さらに、ロマンティズムがドイツに広く浸透していたという事情も、ナチズムの台頭をもたらした要因として見逃せない。非現実的な夢の実現を極めて情熱的に追い求めようとするロマンティズムは、ナチズムの革命運動がアピールする地盤を用意した（Parsons [1942a]1993: 237-241, 訳 111-115 頁）。したがって、原理主義が求める道徳的・情緒的なコミットメント（進歩に対する苛烈な糾弾への参戦）や、ロマンティズムが求める道徳的・情緒的なコミットメント（夢想への熱烈な没頭）がナチズムには伴い、強大な圧力として作用したと考えられる<sup>23</sup>。

また、同じ1942年に公刊された“Some Sociological Aspects of the Fascist Movements”と題する論文では、ナチズムに限らずファシズム一般に共通する特徴が分析されている。そして、ファシズムが激しい情動に突き動かされた改宗運動であるかのように把握されている<sup>24</sup>。つまり、強力な情緒的コミットメントを伴って他者に自分たちの道徳的コミットメントを強制していく革命運動として、ファシズムを捉えている（Parsons [1942b]1993: 204, 訳 119-120 頁）<sup>25</sup>。

もちろん、革命運動を動機づけているような、自分たちが希求する道徳的・情緒的に望ましい状態を何としてでも実現しようとする強迫的な願望は、現実を歪曲して認知する事態を招きがちである。1940年の論説で指摘されているように、まさにドグマティズムに陥る。したがって、科学が何よりも優先すべき客観的な真偽の基準が、道徳的な善悪の基準や情緒的な好悪の基準に従属するよう強いられてしまう（Parsons [1939]1993: 89, Parsons 1951: 357-358, 訳 353-354 頁）。

このように、科学の独立性を妨げその規範と衝突するような特徴を如実に示しているのがナチズム

である<sup>26</sup>。科学とナチズムの緊張関係に着目してパーソンズの科学論とナチズム論をむすびつけるとそのように解釈でき、緊張関係の内実についてより深い理解を得られる<sup>27</sup>。

#### IV 途上：どのように進歩するのか

##### 1 4つの水準

パーソンズの理解では、科学はイデオロギーや宗教的観念と異なり客観的な真偽の基準を優先するのが規範となる。そして、「超自然的なもの」に関する宗教的観念などは異なり、あくまで検証可能な経験の対象に限定して科学独自の知識を産出する。

その基本的な規範、つまり科学的知識に求められる要件は、おそらく次の4つになるとSSでは論じられている。すなわち、①経験的に確かである②個々の命題が正確で論理的に明確である③各命題の含意の間に論理的一貫性（「原理」と解釈できるもの）がある④原理に一般性がある、の4つである<sup>28</sup>。そして、より④に近い水準に到達しているほど、「進歩」した科学であると判断できるという（Parsons 1951: 335, 訳 334 頁）<sup>29</sup>。

この4つの水準は、科学が遵守すべき規範である $\alpha$ 「事実の正確さ」と $\beta$ 「論理的推論の妥当性」を整理の枠組として用いると、分類し直すことができる。すなわち、 $\alpha$ に該当するのが①で、 $\beta$ に該当するのが③と④、 $\alpha$ と $\beta$ の双方に該当して双方を媒介しているのが②になると解釈できる<sup>30</sup>。

また、③と④は科学の進歩の成果となる「理論」を構成すると解釈できる。パーソンズの見解では、理論は論理的に関連し合う多様な命題群の統合体（システム）から成り立っている（Parsons [1937]1968: vol.1, 7, 訳 (1) 23 頁）。したがって、命題同士の関係を表している③と④は理論の骨格になると考えることができる。

##### 2 理論の発展

さらに、上記の4つの水準を参照すれば、理論が発展し科学の進歩がもたらされるダイナミクスについても理解が深まる。つまり、4つの水準という科学的知識に関する命題（前述）と、理論の発展に関する命題（後述）とは、論理的に関連し合っている。パーソンズの科学論を再帰的に適用すると、そのような論理的一貫性を各命題の含意から導き出せると解釈できる。では、パーソンズは自らの科学論の一環として、理論の発展についてどのような命題を提示しているのだろうか。

パーソンズによれば、科学の進歩を意味する理論の発展は、単に $\alpha$ 「事実の集積」による帰納だけから導かれているわけではない。なぜなら、「理論はわれわれの知っていることが何なのかを定式化するばかりでなく、われわれが知りたいものは何なのか、つまり解答の必要な問いが何なのかについても教えてくれる」からである<sup>31</sup>。すなわち、理論に基づき $\beta$ 「論理的推論」を展開することによって、

どのような事実を探索すればよいか研究の進むべき方向性が定められる（Parsons [1937]1968: vol.1, 9, 訳（1）27頁）<sup>32</sup>。したがって、理論は単に科学の進歩の結果である「従属変数」になるだけでなく、それ自体がさらなる理論の発展と科学の進歩をもたらす「独立変数」にもなる（Parsons [1937]1968: vol.1, 6, 訳（1）23頁）<sup>33</sup>。

このように、理論自体が理論の発展をもたらす仕組みを内蔵している。だから、パーソンズは次のように述べている。「科学は、外的圧力さえなければ、静態的であることは不可能である。内在的に発展への動的過程が含まれている」（Parsons [1937]1968: vol.1, 40, 訳（1）72頁）。すなわち、「科学の神は、実に進化に他ならない」。「真正なる科学的精神に敬意をささげる人々にとって、科学は自らが到達した地点をこえて進化するものであるという事実を裏切りと解釈することはできない」のである（Parsons [1937]1968: vol.1, 41, 訳（1）74頁）<sup>34</sup>。

したがって、科学は常に進歩の途上であって未完結であり、「青くさい最終性の僭称にこそ、厳しい警告が発せられる」（Parsons [1937]1968: vol.1, 40, 訳（1）72-73頁）。つまり、その含意を汲みとると、幼児的な万能感に浸らず謙虚な姿勢で異論にも寛容に耳を傾け改良をめざす歩みを止めないことが科学にとっての規範となる<sup>35</sup>。このように、どんな異論も容赦なく弾圧して自分たちのドグマに固執するナチズムとまさに相反する特徴をもつのが、科学の規範になると理解できる<sup>36</sup>。

### 3 実用性との関係

さらに、科学の進歩と実用性との関係について、パーソンズはSSで興味深い指摘を行っている。その指摘を踏まえれば、パーソンズ自身は必ずしも明示しているわけではないが、ナチズムによる軍事技術のための科学の積極的利用についても含意を汲みとることができ、理解を深められる。

パーソンズによれば、実用性が科学の進歩を促進する場合もたしかにある。科学に実用性があれば、科学が社会的な支持を得て社会で大規模に展開することが可能となり、結果として科学の進歩が後押しされるからである（Parsons 1951: 340, 345, 訳 338, 342-343頁）<sup>37</sup>。しかし、実用性はむしろ科学の進歩を抑制するのが通常であると、パーソンズは論じている。

パーソンズによれば、科学の進歩をもたらす条件として①「知識の抽象と一般化」とともに②「特別の研究手順の発達」が求められる。しかし、実用性を重視すると、急迫した状況に即時に対応する必要性から、知識の発達は①「直接関連する文脈に限定される」し②「たやすく手に入る手順に限定される」。したがって、実用性は科学が進歩するための条件を損なう（Parsons 1951: 333, 訳 332頁）。

そもそもパーソンズがSSAで論じているところによれば、科学の進歩にとってどんな $\alpha$ 「事実」も等しく重要なわけではなく、実用性があるかどうかは無関係である。理論に対して $\beta$ 「論理」的にどんな帰結をもたらすかが科学にとっては重要なのである。したがって、ある発見がどれだけ興味深いものであっても、その分野の理論に何の帰結ももたらさないとしたら、その発見は科学的には重要で

はない。あくまで科学の基準に従って重要性が判断されるのである。

だから、「実践的にはきわめて重要な発見も、その多くは科学的には全くどうでもよいものであった」し、「科学的調査研究の成果に関するポピュラーな報告のなかで強調されているのは、普通、科学外的な重要性」にとどまる<sup>38</sup>。逆に、「きわめて偉大な理論的发现をもたらしたあの相対性原理、それを導き出した事実に知識の変化などすべて、理論体系の構造との関連を除けば、どの点からみてもまったく些細なもの」であったといえる。それゆえ、科学的には重要であっても、「工学や航海術のような実践に対して何の影響も及ぼしはしなかった」(Parsons [1937]1968: vol.1, 7-8, 訳 (1) 24-25 頁)。

このように、パーソンズ理解では《科学にとって重要かどうか》は、《実践にとって重要かどうか》という科学の実用性とは区別して考える必要がある。一般的に、実務家は実用的な関心の領域を越えて、それ以上に科学的知識の細部に対する関心を抱くことはない。あくまで実務上の目的を実現することが優先されるし、科学的知識はリソースの一つに過ぎない。しかも、科学者ではない実務家もつばら科学の規範のみに従うことはない<sup>39</sup>。実務家は、既得権益との関係や安心感からいっても、むしろ従来通りのやり方に則るのが通常で、実践に必要な知識は非常に緩慢でちぐはぐにしか発達しない(Parsons 1951: 337-338, 訳 336 頁)。さらに、入手可能な科学的知識が実際に実践で活用されるようになるには、大学のように、研究の機能だけでなく「専門職」という応用科学者に該当する実務家を教育する機能も備えたアカデミックな制度が必須となる(Parsons 1951: 345-348, 訳 343-345 頁)<sup>40</sup>。

したがって、以上のようなパーソンズの指摘を踏まえると、ナチズムが科学をたとえ活用できたとしてもその進歩を促進するようなことはなかったと推測される。軍事技術の発展に寄与するような実用的に重要な結果をもたらす分野であっても、そうなのである(Parsons [1939]1993: 95)<sup>41</sup>。

## V 到達点：成果と残された課題

本稿は、パーソンズの科学論そのものから導かれる方法に基づいて、パーソンズの科学論とナチズム論をむすびつけその含意を汲みとるメタ的な考察を加えた。そして、科学とナチズムの緊張関係について理解を深めた。とりわけ規範をめぐる両者のコンフリクトに着目して、ナチズムが科学の分化や分化や進歩を妨げると考えられるのはなぜなのか、詳らかにした。そのような成果によって、パーソンズの科学論についてもナチズム論についてもより深い理解が得られるようになるだろう。

ただし、残された課題もある。パーソンズの科学論において重要な位置を占める「概念」については、別稿で改めて主題として取り上げるのが適当となるほどの分量になるため、本稿では割愛した。科学の分化や進歩を可能にする「学問の自由」についても同様である。また、本稿ではSSAやSSに焦点を絞ったが、その他の著作でも展開されているパーソンズの非常に内容豊富な科学論から、思わぬ含意を汲みとることができるかもしれない。本稿での成果を足がかりとして、今後検討を加えることとしたい。



## 注

- 1) パーソンズの著作には Nazis や National Socialism という表現がしばしば登場するが、理解の便宜のために、本稿ではナチズム (Nazism) という表現を統一的に使用する。
- 2) パーソンズによれば、ナチズムは自然科学の分野においてすら人種的・政治的事情を優先し、哲学や歴史なども破壊した。しかも、聖パウロ爾後堅持されてきた宗教上の普遍主義の原則 (人種や社会的地位を問わずどんな人間にも救いは開かれていると考える原則) に対してすら、ユダヤ人への迫害に表れているように、ナチズムは公然と挑戦している。つまり、西欧の文明化にとって重要であった科学や一般教養 (liberal learning)、普遍主義といった偉大な伝統を有す文化的基盤を根底から破壊する文化運動となるのがナチズムなのである (Parsons [1938]1993: 81-82)。
- 3) パーソンズによれば、ナチズムの指導者原理は能力や業績よりも忠義に基づいて権限を配分するため、自らの上位者の意向を除けば一切の制約を受けない恣意的な統治をもたらす。つまり、ナチズムは現行の法制度を破壊して封建制へと逆行するような破壊をもたらす、中世以降では最もラディカルな革命運動になる (Parsons [1940]1993: 153-156)。
- 4) パーソンズは SSA によって名声を博し、SS によってさらに名声を博すとともに、その難解さゆえに誤解を生んで数多くの批判を向けられる対象となり「悪名」も馳せるようになったといえよう。
- 5) 端的に言えば、万人の万人に対する闘争というホブズ問題の悲劇をもたらすのがナチズムであり、その悲劇を防ぎ共存共生を可能にするのがリベラル・デモクラシーであることを理論的に示す含意がある (Gerhardt 2002: 34-53)。
- 6) 「足がかり」と表現しているのは、パーソンズの科学論もナチズム論も、決して科学とナチズムの緊張関係という論点だけにはとどまらない非常に豊かな内容を有しているからである。
- 7) したがって、パーソンズの科学論の内容そのもののできるだけ即して考察を加えようとするのが本稿のアプローチの特徴となる。他方で、パーソンズがそのような業績を生み出すこととなった背景事情 (個人的動機や社会的環境) に着目して考察を加えようとするアプローチもある。たとえば、ナチズムが驍威を振るいつつあった当時の風雲急を告げる時代状況に対してパーソンズがどのような認識をもちどのように行動しようとしていたのかについては、パーソンズの私信などを参照しながら、高城 (1988: 1章・2章) が詳しく描き出している。
- 8) パーソンズによれば、無関係な要因はできる限り分離するようにコントロールされている。すなわち、「個人的性格とその背景という点でここで取り上げられている四人の思想家ほど著しい対照を示すものは他には考えられない。マーシャルは強度に道徳的なイギリス中産階級に属する人物であったし、デュルケームはアルザス出身のユダヤ人であり、急進的で反教権主義的なフランスの大学教授である。またパレートは洗練された教養をもつ孤高のイタリア貴族である。そして最後に、ウェーバーは、きわめて教養豊かなドイツの中産階級上層に生まれ、ドイツ理想主義の背景の下に育ち、法学と経済学における歴史学派によって鍛え上げられた人物である。これらの人物相互間の知的影響関係についていえば、ある人物が他の三人の思想形成に対して重要な役割を果たしたといったような関係は見当たらない」 (Parsons [1937]1968: vol.1, 12-14, 訳 (1) 31-33頁)。
- 9) パーソンズは次のように述べている。「四人の人物について、その意見の違いを例示することはもとより可能なことである。しかし提示された証拠からすれば、これが皮相な判断であると結論づけるのが至当であろう。彼らの一致点は、表面上そう見える不一致を遙かに凌駕している。四人の精神のなかで生じたことが恣意的で主観的な判断の噴出であるとは思われない。それは、科学的思考の一つの大きな底流の一部を成している」 (Parsons [1937]1968: vol.2, 774-775, 訳 (5) 199頁)。パーソンズは、そのような科学的思考の発展から成り立つ

- 理論を「経験的に検証しようとする試み」に取り組んだのである (Parsons [1937]1968: vol.2, 697, 訳 (5) 91頁)。
- 10) そのようなメタ的な視点は「汝の行ないを知ることはよきことなり」という原則を踏まえたもので、多くの分野と同様に科学の研究でも役立つとパーソンズは述べている (Parsons [1937]1968: vol.1, xvi, 訳 (1) 4頁)。
- 11) もっとも、SSA では明確に意識されていた「経験的な対象の観察」が、SS ではかなり希薄化されているように思われる。SS の冒頭に掲げられている献辞で「不治の理論病患者」を自称し「実際の経験主義」がパラソンスをとるために必要だったと述べているのは、そのようなメタ的な自省の表明であると考えられる (Parsons 1951: v, 訳2頁)。
- 12) Carney (1994) や Gerhardt (2002) で示されているように、パーソンズの科学としての社会学には、喫緊の課題であるナチズムにどう対処すればよいのかその処方箋を科学的に示すという実践も伴っていた。もっとも、本稿ではそのような実践的含意のある科学としての社会学の具体的内容にまでは立ち入らず、社会学に限定されない科学一般とナチズムの緊張関係のみに焦点を絞る。
- 13) 科学に関するパーソンズの見解は、科学哲学や論理哲学の大家である A・N・ホワイトヘッドの影響を受けていたという事情もあり、相対性理論や量子力学といった先端レベルの研究にも対応する科学理解に達していたと評価されている (Schwanenberg 1976)。また、油井 (1996) はパーソンズの科学論を一種の「プラグマティズム化された分析哲学」として把握し、分析哲学の発展を随分と先取りしていたと評価している。
- 14) 「合理化」について詳しい説明はないものの、比較的近い時期に執筆されたパーソンズの他の著作からすると、ウェーバーに由来すると推察される。すなわち、中世以来の西欧社会におけるダイナミックな発展のプロセスになり、「その中心的な焦点の一つは、産業や医学やその他の領域における科学と科学から由来した技術の継続的な発展」になる (Parsons [1942a]1993: 236, 訳 109頁)。
- 15) 以下の論述のなかで対応関係を分かりやすく示すため、便宜的に  $\alpha$  と  $\beta$  という記号を用いて表記する。
- 16) 科学は自動的に生じるのではなく人間の行為によって生じるわけであるから、他の行為と同様に何らかの規範に導かれていると理解できる。たとえば、「科学者は十分に証明されている科学的な成果や理論の妥当性を受け入れる義務がある」 (Parsons 1951: 336,353, 訳 335,350頁)。このように、規範の働きに着目して人間の行為を理解しようとする見方こそ、パーソンズが SSA で前面に押し出したものであった (Parsons [1937]1968: vol.2, 718-719, 訳 (5) 121-123頁)。
- 17) パーソンズは大学によって担われる高等教育を主題とした共著で、客観性について  $\alpha$  「事実に基づくこと」と  $\beta$  「論理のルール」といった2つの要件に根拠づけられていると述べている。そして、それらの価値は、政治的に意義ある結果をもたらすかどうかに関わりなく研究において追求されるべきものになると、ウェーバーの *Wissenschaft als Beruf* (英訳では *Science as a Vocation*) を参照しつつ論じている (Parsons & Platt 1973: 87)。
- 18) とするならば、神学や文芸批評は、規範として客観的な真偽の基準を科学と共有しつつも、道徳的な善悪の基準や情緒的な好悪の基準も同等に重視する点に科学との違いが見出せると考えられる (Parsons 1951: 349, 訳 346頁)。
- 19) イデオロギーと宗教的観念は、科学と哲学の区別に対応して、経験的な対象に限定されているのかそうでない残余を対象とするのか、といった観点から区別されている。ただし、こうした一連の区別はあくまで分析のために設けられたカテゴリー上の区別であり、具体的な事象においては程度の差はあれ融合しているのがむしろ通常であると考えられる (Parsons 1951: 350, 367, 訳 347, 362頁)。
- 20) したがって、「科学」そのものとは分析上区別できる「科学者集団」にも、そのメンバーシップに関わるイデオロギーを見出すことができる。たとえば、前述のとおり、科学的に十分に証明されているならそれを頑なに

拒否せず素直に受け入れることが、科学者の役割を果たすうえでの規範となる（Parsons 1951: 353, 訳 350 頁）。また、科学者は専門家として「どう認知できるのか」を示すその専門分野の権威であっても、「何をすべきか」を示す道徳的な権威ではない。したがって、道徳的権威になろうとはせず差し控える道徳的義務がある。他方で、科学の価値を移かす反知性主義に対しては許容せず対抗しなければならない。このような規範が科学者集団には存在することになる（Parsons [1939]1993: 91-92,94-95）。

- 21) その分析は、SSA での成果を踏まえて、後に SS に発展的に集約されていくようになる分析枠組を用いて実施されている。つまり、パーソンズの理論的業績は、同時代的出来事として進行していたナチズムの興亡という経験的事実に対峙するなかで産み出されていたと理解できる（Gerhardt 2002: 60-61）。
- 22) 原理主義は専門分化によってもたらされる進歩への抵抗であり、精神分析の視点も取り入れると、成長の変化に歩調を合わせられず反動的にむしろ前段階へと逆行してより原始的な状態に執着しようとする退行現象として理解できる（Parsons [1942c]1993: 175-176, 訳 162-164 頁, Parsons & Platt 1973: 166-170, 176-181）。
- 23) 1940 年の論説では、自分たちの主義主張を何としても押し通そうとするのがナチズムの特徴であると、パーソンズは指摘している。すなわち、一切妥協することなくコスト度外視で「邪悪」とみなした敵を何としても殲滅しようとするドグマへの過剰なまでの固執がみられるという（Parsons [1940]1993: 154）。
- 24) パーソンズによれば、改宗運動のように他者に強迫的に同調を迫るような場合、忠誠に対する極度の配慮や裏切りに対する激しい非難がみられ、強烈な同調圧力が働く。その帰結として、矛先を向ける異端者がスケープゴートとして積極的に探し出されるようになる。その典型的な表れが反ユダヤ主義となる（Parsons 1951: 287-290, 訳 287-290 頁）。
- 25) パーソンズによれば、ファシズムはまず何よりも過激な急進主義（radicalism）として把握できる。なぜなら、普通の人々である大衆が非常に情熱的に、実のところしばしば狂信的なほど、主義主張に対して熱狂する革命運動になるからである（Parsons [1942b]1993: 204, 訳 119 頁）。
- 26) 科学の独立性は、科学がイデオロギーや宗教的観念から「分化」することでもたらされる。そして、科学そのものの分化に限らず、学術分野の専門分化であれ大学といった組織の分業化であれ何であれ、分化こそが社会や個人のアップグレードをもたらす進化的変動の契機になるとパーソンズはみている（Parsons & Platt 1973: 169-171, 379-380）。
- 27) すなわち、1938 年や 1940 年の論説で言及されていたナチズムによる弾圧（ $\alpha$ 「事実」）が、どうして生じるのかその理屈（ $\beta$ 「論理」）について、綿密な説明が可能になるといえるだろう。
- 28) パーソンズの科学論（科学の特徴について論じた複数の命題から構成されている）とナチズム論（ナチズムの特徴について論じた複数の命題から構成されている）をむすびつけ、それぞれの含意のなかからとくに「科学とナチズムの緊張関係」に関して論理的に一貫性のある含意を汲みとり明確化しようとする本稿の試みは、③に該当する科学的な取り組みになるといえるだろう。
- 29) パーソンズはその例証として、植物学の分類法よりも解析力学が「進歩」した科学であると一般的に認められていた事実を参照している。パーソンズによれば、植物学の分類法は膨大な事実を整序する「正確さ」と「明確さ」については疑いがなかったのに対して、解析力学は後に相対性理論や量子力学によって修正される疑わしさがあつた。にもかかわらず、解析力学は個々の事実を一般的な含意へと結びつけることが可能であつたため、より進歩した科学であると認識されていた（Parsons 1951: 336, 訳 334 頁）。
- 30) ②に関しては、科学的知識が  $\alpha$ 「事実に関する秩序」の「正確」な描写であるだけでなく、言語で表現される以上は  $\beta$ 「論理に関する秩序」に従って「明確」な描写がなされる必要があり、双方が複合した産物になる

- ことを示しているのだと解釈できる (Parsons [1937]1968: vol.2, 753-754, 訳 (5) 171 頁)。
- 31) パーソンズは次のように指摘している。「しばしば暗黙裡にだが、科学的知識の進行は本質的に「事実発見」の累積のうちにあるといった見解が根深い形で存在している。知識は、全く量的なものと考えられている。以前に観察されなかったものを〔新たに〕観察すること、これが重要なのである。この見解によれば、理論とは既知の事実総体が正当化するような一般の言明という意味で、既知の事実からの一般化にすぎない」(Parsons [1937]1968: vol.1, 6, 訳 (1) 22 頁)。
- 32) 留意しておくべきは、 $\beta$ 「論理的推論」による演繹だけでなく、裏付けとなる $\alpha$ 「事実の発見」も必要になるという点である。つまり、 $\alpha$ 「事実」だけでも $\beta$ 「論理」だけでもなく、あくまで両者の複合から科学の進歩がもたらされると考えられている。科学である限りは、(ナチズムと違って)恣意が支配しないように、経験的な検証が不可欠となるのである (Parsons [1937]1968: vol.2, 754, 訳 (5) 171 頁)。
- 33) パーソンズは次のように述べている。「正しい理論は事実と適合しなければならないのはいうまでもない。しかしこのことを認めたからといって、理論の何たるかを決めるのは、理論と独立に発見された事実のみであるとか、あるいはまた、どんな事実が発見されるであろうかとか科学的研究の関心はどの方向に進むべきだろうかとかを決定する上で、理論が何の役割をも果たさないなどということにはならない」(Parsons [1937]1968: vol.1, 6, 訳 (1) 23 頁)。
- 34) まさにSSAにおいてパーソンズが科学的に明らかにしようとしたのは、古典力学が自壊し量子力学が新たに生み出されたように、かつて一世を風靡した理論(功利主義に代表される実証主義的な理論)が内破し新たな理論(実証主義の諸問題を克服する行為の理論)が生み出されるに至った過程である (Parsons [1937]1968: vol.1, 469-470, 訳 (3) 238 頁)。もちろん、新たな理論も最終的なものではなく、さらなる発展のための確固とした出発点、つまり「足がかり」となる (Parsons [1937]1968: vol.2, 724-725, 訳 (5) 130 頁)。
- 35) つまり、リベラルな批判的精神を具現化するような規範であり (Parsons [1940]1993: 156)、後にパーソンズによって instrumental activism (道具的活動主義)として定式化される価値パターンに即した規範となる (Parsons & Platt 1973: 40-42)。
- 36) ドグマティズムにみられるような固定観念や先入観への囚われは、「学問の自由」のように自由な真理の探究を規範とするリベラリズムと相容れないのである (Parsons [1939]1993: 89)。
- 37) 「科学の進歩は「良いこと」だからといって科学の発達を実現する過程もその成果の適用も、容易にかつ「自動的に」受容されるのが当然であるとして考えてはならない。それどころか、逆にいくたの緊張と抵抗がみられる」とパーソンズは述べ、科学の専門家と非専門家の間に生じるコミュニケーション・ギャップや、科学の進歩による技術革新がもたらす既得権益の喪失(たとえば失業)といったような諸課題が社会的に存在すると指摘している (Parsons 1951: 505-507, 訳 498-500 頁)。
- 38) とはいえ、科学が民衆から支持を得るには、科学者が科学的な基準を十分には満たしていない事柄まで科学の名のもとに語り、驚くべき奇跡を実践する「近代の魔法使い」としてみなされるようになることすら不可欠であると、パーソンズは述べている (Parsons 1951: 340-341, 訳 338-339 頁)。
- 39) つまり、ナチズムの実践であろうがそうでなかろうが、科学的な基準よりも道徳的な基準や情緒的な基準が優先されると考えられる。
- 40) そのような制度が確立していても、技術革新は堅固な抵抗に遭遇するし、技術革新のもたらす明白な利益にもかかわらず技術革新がしばしばおどろくほど緩慢で不完全になるのがたいの社会であると、パーソンズは指摘している (Parsons 1951: 347, 訳 344 頁)。にもかかわらず、既に紹介したとおり、そうしたアカデミック

な諸制度を完膚なきまで破壊したのがナチズムになる（Parsons [1938]1993: 82-83）。

- 41) パーソンズは、ナチズムと同じような特徴を有する革命運動が政権奪取に成功した例として、ソビエトを挙げている。そのソビエトに関して、極めて硬直的で自由が乏しい社会であることから、一時的には急速な科学技術の発展がみられても、いずれはその抑圧に帰着するかもしれないと、パーソンズは述べている（Parsons 1951: 515, 521-525, 533, 訳 507, 512-516, 523 頁）。

〔文献〕

- Camey, Larry (1994) "Sociology in the Throes of Fascism: Parsonian Meliorism and Myths of Triumphalism," *International Journal of Politics, Culture and Society*, 7-3, 469-483.
- Gerhardt, Uta (2002) *Talcott Parsons: An Intellectual Biography*, Cambridge University Press.
- Parsons, Talcott [1937] (1968) *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, McGraw Hill. 2d edition, 1949, reprinted in paperback, vol.1-2, Free Press (稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造(1)～(5)』木鐸社)。
- Parsons, Talcott [1938] (1993) "Nazis Destroy Learning, Challenge Religion," *Radcliffe News*, November 23, in Uta Gerhardt, ed., *Talcott Parsons on National Socialism*, Aldine de Gruyter.
- Parsons, Talcott [1939] (1993) "Academic Freedom," Unpublished Manuscript in the Harvard University Archives, in Uta Gerhardt, ed., *Talcott Parsons on National Socialism*, Aldine de Gruyter.
- Parsons, Talcott [1940] (1993) "New Dark Ages Seen If Nazis Should Win," *Boston Evening Transcript*, September 28, in Uta Gerhardt, ed., *Talcott Parsons on National Socialism*, Aldine de Gruyter.
- Parsons, Talcott [1942a] (1993) "Democracy and Social Structure in Pre-Nazi Germany," *The Journal of Legal and Political Sociology*, 1, in Uta Gerhardt, ed., *Talcott Parsons on National Socialism*, Aldine de Gruyter (谷田部文吉訳「ナチ以前のドイツにおける民主主義と社会構造」新明正道監訳『政治と社会構造(上)』誠信書房)。
- Parsons, Talcott [1942b] (1993) "Some Sociological Aspects of the Fascist Movements," *Social Forces*, 20, in Uta Gerhardt, ed., *Talcott Parsons on National Socialism*, Aldine de Gruyter (谷田部文吉訳「ファシズム運動の若干の社会学的側面」新明正道監訳『政治と社会構造(上)』誠信書房)。
- Parsons, Talcott [1942c] (1993) "Max Weber and the Contemporary Political Crisis," *Review of Politics*, 4, in Uta Gerhardt, ed., *Talcott Parsons on National Socialism*, Aldine de Gruyter (谷田部文吉訳「マックス・ウェーバーと現代の政治的危機」新明正道監訳『政治と社会構造(上)』誠信書房)。
- Parsons, Talcott (1951) *The Social System*, Free Press (佐藤勉訳『社会体系論』青木書店)。
- Parsons, Talcott & Gerald M. Platt with the collaboration of Neil J. Smelser (1973) *The American University*, Harvard University Press.
- Schwanenberg, Enno (1976) "On the Meaning of the General Theory of Action" in Jan J.Louber, et al. eds., *Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons*, Free Press.
- 高城和義 (1988) 『現代アメリカ社会とパーソンズ』日本評論社。
- 油井清光 (1996) 「パーソンズの科学論」社会学雑誌 14 号 42-55 頁。

\* 翻訳文献が出版されている場合は、翻訳文献から引用した。

